

解決のヒントは黒川さんの説明のなかにありました。一般的に簡描きは太い輪線も一気に引きますが、京都では太い線は糸目(細い顔目)をおくこともあるそうです。これは、デザインソフトのillustratorの「線のアウトライン化」と同じ考え方で、白い線を色面として認識していることにはなりません。なので、白い線は必ずしも白の必要はなく、幅も一定でなくて構わないのです。学生がデザインするにあたり、大漁旗本来の意味や特徴は失わないように気をつけながらも、白線を色面としてとらえ、デザインの要素として活かしたければ使えばいいし、使わない表現であっていいことになりました。手描きのマチエールなどインクジェットならではの表現を活かし新鮮なイメージの大漁旗になるよう制作を進めました。

1カ月後、たごや編が明石海航大橋とともに描かれ、境港では妖怪たちと蟹が登場するなど自由なアイデアのある40点のデザインが仕上げました。確認のため1/2サイズのペーパープリントをロンドンに発送したところ大層気に入っていただき、直営のペーカリーショップで展示されました。スタッフやお客さんの評判もよく、買い取り希望がかなりあったそうです。すべてのデザインにOKがでたので、京都の印染会社、(有)スギシタさんの協力で1400x2100の大ききで両面プリントを行ない、通常の旗の左辺のみにつけるハトメを、左辺と上辺、および右下につけました。縦横どちらの方向でもかけられ、壁面展示にも対応するためです。

今後はロンドン、パリ、マドリードでイベントが予定されていますが詳細はまだ未定です。大漁旗をウェアやグッズに展開する計画もあり、またご報告できる機会があればと思います。

文責：滝口洋子

023. 子供の眠りと繊維製品

「子供の眠りが危ない」といわれて久しいが、研究機関の調査によると日本の子供たちは発育期に世界で一番眠っていないのだそうだ。睡眠不足がもたらす体への影響は大きく、特に10歳～12歳までの子供に深刻なダメージを与えるといわれている。睡眠不足が続く子供の状態としては精神的に不安定、キレる、カンそして高血圧、高血糖、肥満など成人病と同じような症状、脳機能の低下(記憶など)がみられるそうだが、そんな子供たちが大人になった時、心身に健康な生活が送れるのか心配になる。「寝る子は育つ」は本当なのだ。乳幼児からの睡眠習慣は、その子の人生を左右しかねない大切なことなのである。

だが子供は自分で生活リズムをコントロールできない。眠らないうではなく、眠れないのだ。原因は様々…明るい夜、楽しいゲーム、屋間に外で遊ばない、塾や習い事で遅くなる、大人の時間にひっぱられる…など。もっと大人が管理すべきなのだが、残念ながら子供にとって睡眠がどれだけ重要か知らないために「子供は疲れたら自然に眠る」と思っている人が多い。そして自分の子供が眠らない理由が分からずイライラ、つい叱ってしまい悪循環に陥っているのが現状である。

では繊維製品で「子供の眠り」を守る手助けができないだろうか？子供が眠る場所・環境はどうなっているのだろうか？日本は住宅事情や寒い環境という習慣等から子供が眠る場所が親と一緒にすることが多く、明るかったりTVが付いていたりなど眠れない環境にある。また体温が高く汗かきの子供が親の寝具で眠ることも多いようだ。共働きで昼間に子供と遊ぶことが出来ない親に添い寝はダメ、とは言えない。独立した部屋を与えるものもなかなか難しい。一方、市場を見ると子供の発達や体質を考慮した子供用寝具や睡眠習慣を付けさせるための寝具はわずかで、選択の幅が狭い。子供はすぐに大きくなるし、汚すからイ物は必要ない、安くても売れない、ということなのだろうか。が、繊維製品の企画・モノ作りに関わる一人としては「そこを何とかして子供達にとって質の良い眠りがとれる環境を作りたい」と思う。

寝具売り場で高価なムートンのマットにダイビングしてそのまま眠った子(店員さんは冷や汗もの)、自分の枕を自身で作って好きな柄のカバーを選び、とても嬉しそうに抱えて変える子などを見てると「何とか」出来そうに感じる。触感を含めたデザインのチカラで眠ることを楽しむ環境作り＝ハードルは高いがゲームやTVより楽しいもの、秘密基地のようなお気に入りのスペース作りが出来るのではないだろうか。寝具など繊維製品は触る、見る、使う、片付けるなど子供にとっては色々な感覚を感じ習得できる良い教材にもなる。そういう視点からも、子供の発達や体質の特徴を考慮し、心身の健やかな成長を手助けできる製品作りをするようにしたい。そして理想は、単にモノを作り売って終わるのではなく、眠りについての知識や使用した子供の様子など双方向の情報交換をしながら、子供と親にとってより良い繊維製品作りを目指すべきだと考えている。

文責：吉川 愛子

024. 東北の布の研究、調査から

2013年度から4ヶ年計画で私のフィールドワークとして、東北の布の調査を実施している。東日本大震災をさかんに、あらゆる価値観のリセットが行われ、自然エネルギーの見直しなど、さまざまなシステムの改革が必要とされている。その中で東北は、固有の織文やアイヌ文化をルーツとする「アニミズム的、あるいは自然主義」の生活文化を今でもかるうじて継承している地域であり、その結晶としての染織品が細々と受け継がれている。これらの伝統染織品は厳しい自然環境の中、貧しい生活が清いとされる精神性に裏付けされ、とてつもない手間のかかる、人の想いの詰まったものばかりである。

「刺し子や裂き織り」などは布を再生したエコロジーの精神がわたちになつたものである。合理生を追求してきた現代社会が忘れていた「時間と手間をかける」ことの価値が、ここ東北の地では今なお生き続けている。今こそこれらの優れた東北の布の調査、研究を通じ、物だけでなく東北の文化や精神を背景としたものづくりの現場から、エコ社会の手本ともなる「現在、未来におけるも価値ある布づくり」を伝統染織や布を通じて探りたいという想いがある。

かつての東北は織文文化をルーツとし、北部においては、狩猟民族のアイヌ民族も生活していた可能性が高い。寒冷地で厳しい自然環境の中で自然を崇拝するつましい生活の中で育まれた東北の布にスポットを当て、調査研究することが今必要ではないかと考えてのことである。

東北の地は、沖縄や八重山などの南の温暖で小さい島々とは違い、非常に広大で険しい山河に囲まれており、厳しい環境のせいもあってか、今まであまり東北の染織品について調査、研究してきた研究者も少ないのが現状であろう。

今回東北の布の研究、調査を行うきっかけとなったのは、私の本務校である金沢美術工芸大学のプロジェクト「平成の百工比照集収作成事業1」の染織品の収集であった。私は2012年よりこのプロジェクトの収集にあたってきたのだが、このプロジェクトは2009年よりスタートしており、染織文化の華やかな近畿、関東、沖縄地方は、私の関わる年にはほぼ収集を終えていた。まだ収集を終えていない地は、九州地方と東北地方であり、2012年の夏約2週間で東北の主な染織産地を回ることとなった。この収集の旅は、新しい発見の連続であり、東北秋田の地で生まれ育った私にとっても衝撃的な布との出会いであった。

調査にあたり、まず東北の染織分布から考え、私は3つの地区に分け順々に調査することとした。まず1つ目は、東北の中でも比較的温暖で豊かな土地もある福島地区と宮城地区。二つ目はとても険しい山河に囲まれ、気候もきびしく穀物の生育も厳しい岩手、青森地区。三つ目は積雪が多く厳しい寒さの地であるものの、穀物に適した豊かな土地、北前船文化の恩恵、鉱山が多々あった等特色ある秋田、山形地区に分けて調査することとした。

今までに、福島、宮城、岩手、青森についての調査を行ってきたが、残念なことについて最近まで生産されていたところが廃業したという事がこの調査中でも目撃があった。今の段階では「東北の布」を通じて多くを語ることはできる段階ではないが、今までの調査を通じて、やはり同じ東北人としてこれらの仕事をもちと知ってほしいし、これらの仕事の価値を、是非とも現代、未来の人々に理解してほしいという想いが、ますます強くなった。

この3年間で現地に向かいだ産地、工房の布をリストアップしておく。会津木綿、会津型、からむし織、川俣羽二重、以上が福島。白石紙子、常盤紺型、正藍冷染が宮城。ホームスパン、さき織り、亀甲織、南部古代型染が岩手。南部菱刺、津軽ごん、南部裂織が青森、秋田黄八丈、ぜんまい白鳥織、浅舞絞りが秋田、羽織しな布、紅花染め、置賜縮が山形。以上がこの3年間で訪ねた産地、工房であるが、後2年—週り周り終える予定である。

柳宗悦は、1948年6月に刊行された著書『手仕事の日本』の中で東北の仕事の次のように書いている。「東北人の暮らしには非常に富んだ一面のあることを見逃すことが出来ません。そこでは日本でのみ見られるものが豊に残っているのです。従ってそこを手仕事の国と呼んでもよいでありましょう。なぜか手技が忙しく働くのでありましょう。思うに三つの原因があって、それを求めているのであります。一つは中央の都から遠いため、かえって昔からの習慣がよく保たれているからであります。このことは郷土固有のものを暮らしに多く用いることを意味します。作るものに外国の品を真似たものをほとんど見かけません。そんなものの存在を知る機縁がないともいえます。それらの土地の伝統は根強いのであります。二つめには地理がそれに応じたものを作らせるからであります。その気候や風土は多くの独特なものを求めます。異国の人たちは雪に堪える身形や持物を用意せねばなりません。それらのものは都からは運ばれて来ません。人々は色々なものを作って、自分やまた家族の者のために準備せねばなりません。しかもそれは実用は堪え得るように念入りに作ることを求めます。このことは手仕事を忙しきさせ、またその技を継ぎさせました。仕事に着美なものが多いのはこのためであります。三つには雪の季節が長いことに因ります。自から家に閉じこもってその長い時間を手仕事で過ごします。野良で働くことは封じられても、家の内にはあさねばならぬ仕事が残っているのです。これはあるがために夏下冬の長さも、早く過ぎてゆきます。雪と手仕事には深い関係がひそみます。これこそは北国に様々な品物を生みしめる一つの原因であります。これらのことを思うと、東北の国々になぜ固有の品が豊にあるかを解することが出来るのであります。今まで何かにけ引目を感じていた東北人は、かえって誇りをこそ抱いてよいと思います。後れていると思う品物がむしろ新しい意味を以て生き返って来るのであります。」

この「手仕事の日本」は第二次世界大戦中に書かれたものであり、ここに書かれている東北の手仕事についても、戦前の現状を述べたものはずである。しかし、驚くべきは半世紀以上前に書かれたものであるにもかかわらず、東北の工芸品(民芸も含む)に対する感想は、今とあまりずれは感じない。

冒頭にも述べたが、近年になって失われた手仕事や産業もあるが、ITが発達し、自由に迅速にあらゆる情報を得られる今、そして先進国の日本において、このような仕事が残っていることは奇跡である。これは東北の地であるが故なのであろう。先程の柳宗悦の文の終わりに、「後れていると思う品物がむしろ新しい意味を以て生き返って来るのであります。」とあるが、まさにこれからの時代、東北の仕事や品々が新しい意味を以て、新しい価値観を生み、未来へ向わせてくれることを願い、今後も調査にあたりたい。

参考文献

『ものと人間の文化誌65・監 風土が生んだ色』 竹内淳子、法政大学出版局、1991年
『エミシ/エゾからアイヌへ』児島恭子、吉川弘文館、2009年
『改訂 エミシ研究 蝦夷史伝とアイヌ伝説』田中勝也、1998年

引用

『手仕事の日本—柳宗悦著』発行者：山口昭明、岩波文庫、1985年、P57～59の文言を引用
文責：大高 亨

